

石神遺跡出土の東北系 黒色土器

一石神遺跡第3～8・11次ほか

1 はじめに

現在、考古第二研究室では石神遺跡出土品をはじめとした飛鳥時代の土器の再整理と調査研究を進めている。昨年度は石神遺跡第7次調査の土坑SK1244とSK1245から出土した土器を再整理し、再検討の結果を報告した。その結果、東北地方産と考えられる黒色土器（以下、東北系黒色土器と呼ぶ。）が、飛鳥浄御原宮期の土器にともなって出土していることをあきらかにした¹⁾。

これまでにも石神遺跡出土の東北系黒色土器はB・C期の遺構から、あるいは飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器にともなって出土することが指摘されている²⁾。しかし、出土遺構や層位の詳細は示されてこなかった。そこで、今回は石神遺跡出土の東北系黒色土器の全体像を提示し、共伴して出土した土器の検討を通じて、その位置づけを再考する。

2 黒色土器

宮城県仙台市郡山遺跡出土の黒色土器³⁾に形状や調整方法の類例を確認できたものを東北系黒色土器と判断した。これまでに石神遺跡で確認した65点の東北系黒色土器のうち53点が遺構からの出土⁴⁾である（表18）。ここでは、口径残存度が約1/8以上の19点を図化した（図162）。

65点の東北系黒色土器には、内面を黒色処理したA類（1～15・17～19）と内外面を黒色処理したB類（16）がある。A類は、口縁部と体部の境に段や稜を有するもの（1～9・13・14・17）と、段や稜をもたないもの（10～12・15・18・19）があり、後者は半球形（10・12・15・18）と口縁部にかけて外反するもの（11・19）に細分できる。

A類の18点には、内面にヘラミガキを施す。1の口縁部の外面をヨコナデした後、まばらにヘラミガキを施す。底部の調整はヘラケズリ。15の外面には底部をヘラケズリで調整した後、全体にヘラミガキを施す。そのほか16点の外面調整はヘラケズリ。

B類の16は口縁部と体部の境に段や稜をもたず、全体の形状は半球形を呈する。内面調整はヘラミガキで、外面には底部をヘラケズリ調整した後、全体にヘラミガキを施す。

表18 石神遺跡出土の東北系黒色土器

次 数	出土遺構	時 期	残存率	点数	図162
3次	SD310	D期以降	1/8以下	1	
3～5次	SD640	C期	1/8	3	3・6・14
			1/8以下	1	
			細片	4	
4次	SK762	C期	細片	1	
	SK774	C期	1/8	1	13
6次	SD890 石組採取穴	A期以降	1/4	1	15
5次	SB925 北西隅柱穴掘方	C期	1/4	1	2
7次	SK1181	B・C期	1/8以下	1	
	SK1244	C期	細片	1	
	SK1245	C期	完形	1	12
	SK1254	C期	1/4	1	1
8次	SD1331B 側石採取穴	A期以降	細片	1	
	SK1342	A期以降	1/8以下	1	
	SK1362	B・C期	1/8	1	5
	SK1388	B期	細片	1	
	SK1408	C期以降	3/4	1	19
16次	SD4090	D期	細片	1	
3～5・7～9・12次	B期整地土	C期	完形	2	4・10・17・18
			3/4	1	
			1/2	1	
			1/4	1	
			1/8	4	
			1/8以下	9	
			細片	12	

3 出土遺構および共伴土器

次に、東北系黒色土器の出土遺構および共伴土器の概要を示す。口径残存度が約1/4以上のものを中心に図化した。B期整地土、南北大溝SD640、土坑SK1244・1245出土土器については既報告⁵⁾を参照されたい。

自然流路SD310 調査時の所見では調査区内の諸遺構廃絶後に生じた自然流路とされる。7世紀後半代の南北棟建物SB510を覆うが、詳細な時期は不明。整理用木箱2箱分（東北系黒色土器を1点含む。）の出土土器には、土師器杯A、杯B、杯蓋、杯C、杯H、皿A、壺、甕、甗、須恵器無台杯、杯B、杯蓋、鉢、壺、甕、平瓶等がある。須恵器杯蓋にはかえりがあるものとなないものが併存する。

南北大溝SD640 藤原宮への遷宮にともない廃絶した大溝。整理用木箱209箱分（東北系黒色土器を8点（図162-3・6・14）含む。）の出土土器には、土師器杯A、杯B、杯蓋、杯C、杯G、杯H、高杯、鉢、盤、鉢H、壺、甕、甗、須恵器無台杯、杯B、杯蓋、無台碗、碗B、鉢A、鉢F、高杯、皿A、皿B、皿蓋、盤、壺、甕等がある。須恵器杯蓋にはかえりがあるものとなないものが併存する。

土坑SK762 埋土に炭を含む土坑。整理用木箱2箱分（東北系黒色土器を1点含む。）の出土土器には、土師器杯A、杯蓋、杯C、杯H、皿B、鉢H、甕、甗、甗、須恵器杯B、杯蓋、高杯、壺、横瓶、甕等がある。須恵器杯蓋はかえりがあるものとなないものが併存する。

土坑SK774 埋土に炭や焼土を含む土坑。A-2期の掘立柱建物SB811の柱穴を覆う。整理用木箱3箱分（東北系黒色土器を1点（図162-13）含む。）の出土土器には、

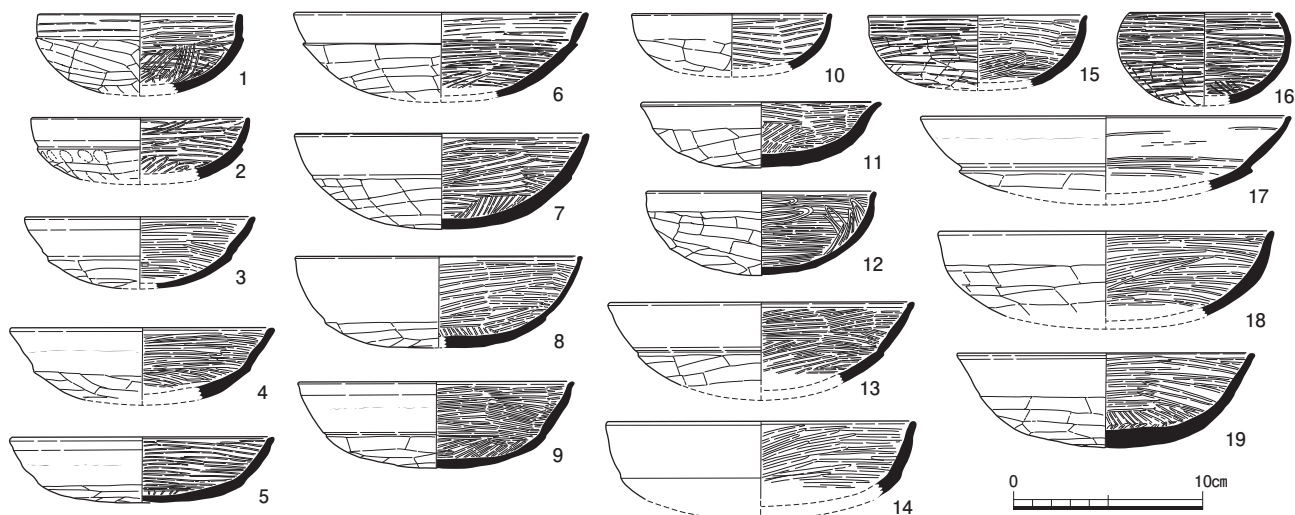


図162 石神遺跡出土の東北系黒色土器 1 : 4

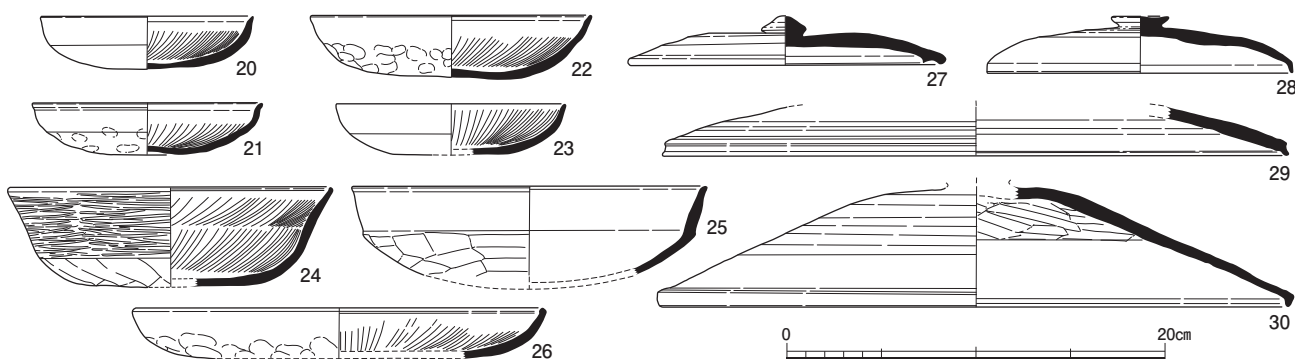


図163 SK774出土土器 1 : 4

土師器杯A (24)、杯C (20~23)、皿A (26)、鉢H (25)、壺、甕、須恵器杯B、杯蓋 (27・28)、皿蓋 (29・30)、壺、甕等がある (図163)。須恵器杯蓋はかえりがあるものとなないものが併存する。

石組溝SD890 (石組抜取穴) A-2期の南北石組溝で、石組抜取穴から東北系黒色土器1点 (図162-15) が出土した。出土した土器は整理用木箱1箱分未満で、土師器杯 (31)、壺、甕、須恵器杯B (32)、甕等がある (図164)。

掘立柱建物SB925 (北西隅柱穴掘方) C期の桁行2間以上、梁行2間の東西棟建物。A期の石敷SX880を埋め立てた礫上で検出。東北系黒色土器1点 (図162-2) のみ出土。

土坑SK1181 A-3期の南北棟建物SB990の柱穴を破壊する土坑。整理用木箱2箱分 (東北系黒色土器を1点含む。) の出土土器には、土師器杯A、杯C、皿A、甕、須恵器無台杯、杯B、杯蓋、甕等がある。須恵器杯蓋にはかえりがあるものとなないものが併存する。

土坑SK1244・SK1245 B期整地土を掘り込む土坑。整理用木箱30箱分 (東北系黒色土器を2点 (図162-12) 含む。) の出土土器には、土師器杯A、杯B、杯蓋、杯C、杯G、杯H、杯、皿A、台付鉢、鉢H、盤A、壺、甕、甗、甗、須恵器無台杯、杯B、杯蓋、無台碗、碗B、皿A、皿B、皿蓋、鉢A、高杯、盤、平瓶、横瓶、壺、甕等がある。須恵器杯蓋にはかえりのあるものとなないものが併存



図164 SD890 (石組抜取穴) 出土土器 1 : 4

する。

土坑SK1254 A-3期の回廊SC820の柱穴を覆う土坑。埋土に炭や焼土を含む。整理用木箱9箱分 (東北系黒色土器を1点 (図162-1) 含む。) の出土土器には、土師器杯A (36・37)、杯B (38)、杯C (33~35)、杯H、皿A (39・40)、壺、甕、須恵器無台杯 (44・45)、杯B (46・47)、杯蓋 (41~43)、盤、壺、甕等がある (図165)。須恵器杯蓋にはかえりがあるものとなないものが併存する。

石組溝SD1331B (側石抜取穴) A-3期の石組溝SD1332、SD900に接続する斜行石組溝。側石抜取穴から出土した整理用木箱2箱分 (東北系黒色土器1点含む。) の土器には、土師器杯C、皿A、甕、須恵器杯蓋、甕等がある。土師器皿Aは坂田寺SG100出土品に類似するやや深手のものがあり、共伴遺物のなかではやや古相を示す。須恵器杯蓋はかえりを有するもののみ。

土坑SK1342 A-3期の石組溝SD1331の上で検出した土坑。整理用木箱1箱分 (東北系黒色土器1点を含む。) の出土土器には、土師器杯A、杯蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、鉢、甕、須恵器杯B、杯H、皿蓋、甕等がある。

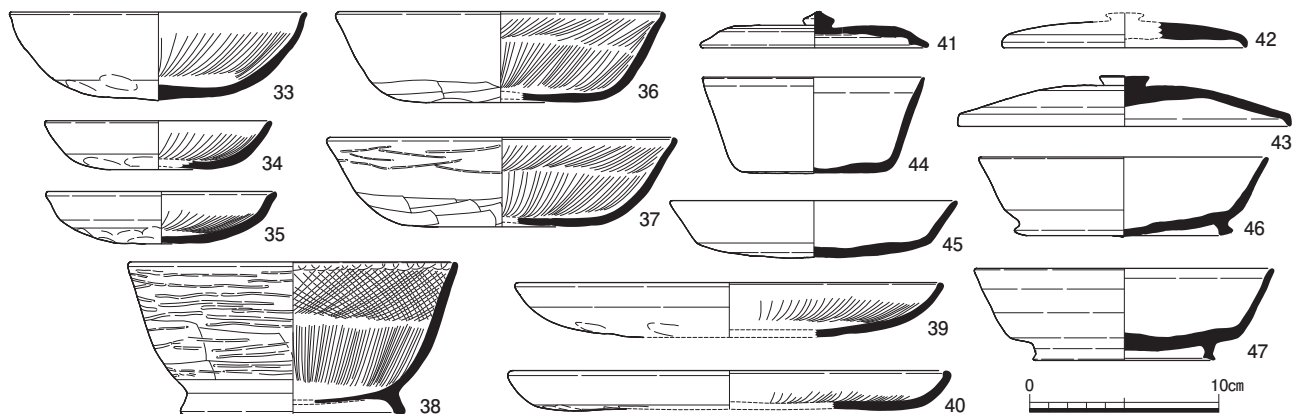


図165 SK1254出土土器 1 : 4

須恵器皿蓋はかえりを有する。

土坑SK1362 A-3期の東西棟建物SB1330の柱穴を覆う土坑。整理用木箱3箱分（東北系黒色土器を1点（図162-5）含む）の出土土器には、土師器杯A（51）、杯C（48～50）、皿A（52）、鉢（53）、大型鉢（54）、甕、須恵器無台杯（58～60）、杯B（61）、杯蓋（55～57）、甕等がある（図166）。須恵器杯蓋にはかえりがあるものとなないものが併存する。

土坑SK1388 A-3期の東西棟建物SB1330を覆う土坑SK1387との重複関係にあり、それより新しい時期の土坑。埋土に炭を含む。整理用木箱1箱分（東北系黒色土器を1点含む。）の出土土器には、土師器杯C、杯G、皿A、鉢、壺、甕、須恵器無台杯、杯蓋、皿B、甕等がある。須恵器杯蓋にはかえりがあるものとなないものが併存する。

土坑SK1408 C期の南北溝SD1347に沿うような形状の土坑。掘込穴あるいは掘方。埋土に炭を含む。整理用木箱1箱分（東北系黒色土器を1点（図162-19）含む。）の出土土器には、土師器杯A、杯B、杯C、皿A、鉢、甕、須恵器無台杯、杯B、杯蓋、鉢、壺、甕等がある。須恵器杯蓋にはかえりがない。

南北大溝SD4090 出土した土器や木簡の内容から藤原宮期の大溝と考えられる。整理用木箱1箱分（東北系黒色土器を1点含む。）の出土土器には、土師器杯A、杯C、杯G、皿A、壺、甕、須恵器無台杯、杯B、杯蓋、無台碗、甕等がある。杯蓋は口縁部を欠き、かえりの有無は不明。

B期整地土 掘込みをともなう遺構ではないが、天武朝の大規模な改修にともなう盛土。第5・10～12次調査で出土した土器は整理用木箱317箱分（東北系黒色土器を30点（図162-4・7・8～10・11・16～18）含む。）で、土師器杯A、杯B、杯C、碗B、杯G、杯H、皿A、皿B、鉢A、鉢H、盤、高杯、須恵器無台杯、杯B、杯蓋、無台碗、碗B、皿A、皿B、高杯、杯H等がある。須恵器杯蓋にはかえりのあるものとなないものが併存する。

以上、東北系黒色土器が出土した遺構および出土土器について述べてきた。古相を示すものには、SD890出土

の須恵器杯BとSD1331B出土の土師器皿Aがある。前者は飛鳥Ⅲの基準資料である大官大寺下層SK121出土品や飛鳥ⅣのB期整地土出土品に類品がある。後者は細片だが坂田寺SG100出土品に類品があり、斉明朝頃までさかのぼるものである可能性がある。

SD890、SB925、SD1331B以外の出土品には、須恵器杯蓋、皿蓋を含む。SK1342出土品はかえりを有する蓋のみ、SK1408出土品はかえりのない蓋のみ、SD4090出土の蓋はかえりの有無が不明だが、そのほかの遺構出土品にはかえりがあるものとなないものが併存し、飛鳥時代の都城土器編年⁶⁾の飛鳥Ⅲ～Ⅴの様相を示す。

図化したSK774・1254・1362出土の土師器杯Cは、底部を欠くものがあり復元値を含むが、径高指数が21～30である。これは、昨年度開催したシンポジウム「飛鳥時代の土器編年再考」で提示された、尾野善裕の区分案におけるd・e様相⁷⁾、大澤正吾の区分案におけるCd群⁸⁾にほぼ合致し、B期整地土、SD640、SK1244・1245出土品も同様である。

以上の所見をふまえると、SD890（石組抜取穴）、SB925（北西隅柱穴掘方）、SD1331B（側石抜取穴）からの出土品を除き、石神遺跡出土の東北系黒色土器は飛鳥Ⅳ・Ⅴ、つまり飛鳥浄御原宮期から藤原宮期に位置づけうる。

なお、東北地方出土品に類例を確認できないため、前述の65点に含めていない黒色土器がある。内外面が黒色の高杯脚部1点および杯部2点と壺甕類の底部1点で、出土層位や遺構が不明の高杯の杯部1点以外は天武朝から藤原宮期の遺構（SD1347・4090・4285）からの出土品である。出土位置不明品についてもSD1347出土の高杯の杯部と形質が共通しているため、ほぼ同時期の遺物と判断できる。

4 文献資料

これまで石神遺跡出土の東北系黒色土器は、『日本書紀』の斉明朝における蝦夷饗応と関連づけて理解されることが多かった。たしかに、斉明朝の蝦夷飛鳥来訪は、『日

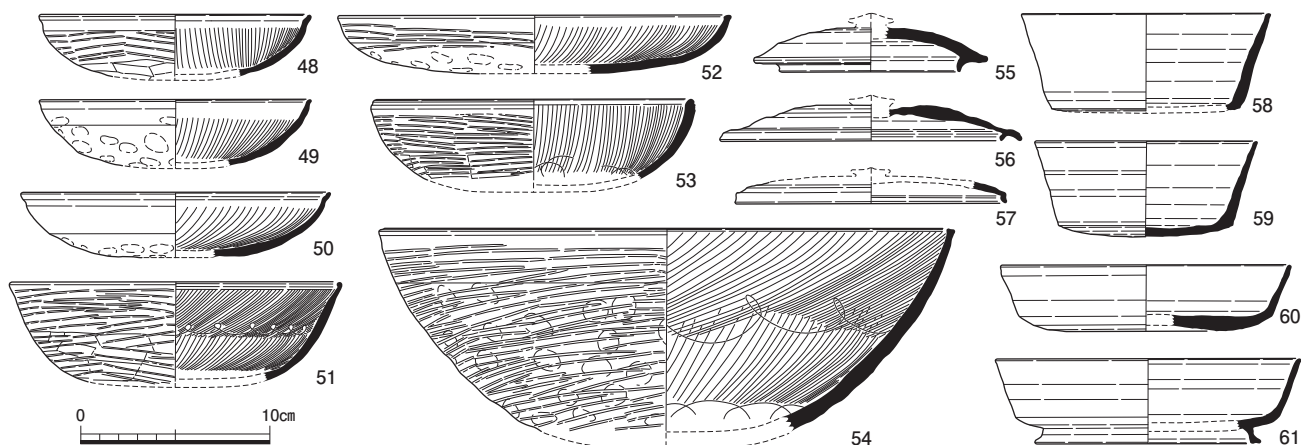


図166 SK1362出土土器 1:4

表19 飛鳥浄御原宮期から藤原宮期の蝦夷関連記事

年月日	記事
斉明天皇元年 (655)	この年、蝦夷や隼人が集団を率いて帰属の意を表し、宮殿に参上して物を献上した。
斉明天皇4年 (658)	蝦夷200人余りが宮殿に参上して物を献上した。天皇は手厚く饗応し、多くの賜物、位階を与えた。
斉明天皇5年 (659)	飛鳥の甘檜丘の東の川原に須弥山を作って、陸奥と越の蝦夷を饗応した。
斉明天皇6年 (660)	阿倍比羅夫が蝦夷50人余りを献上した。また、石上池のほとりに須弥山を作って肅慎47人を饗応した。
天武天皇11年 (682)	3・乙未 陸奥国の蝦夷22人に、爵位を与えた。 4・甲申 越の蝦夷の伊高岐郡らが、俘囚70戸で一部としたいと願い出て、許された。 9・壬戌 皇太子以下の王侯ら48人に熊とカモシカの毛皮を与えた。
持統天皇2年 (688)	11・己未 蝦夷190人余りが調を背負って謀をした。 12・丙申 蝦夷の男女213人を飛鳥寺西の槻木の下で饗応し、位を受け、物を与えた。
持統天皇3年 (689)	1・丙辰 務大膳陸奥国優略雲部の城裏蝦夷の脂利古の息子、麻呂と鉄折が、出家したいと願い出て、許された。 壬戌 越の蝦夷の僧道信に、仏像や仏具が下賜された。 7・壬子朔 陸奥の蝦夷の僧、自得に仏像・鐘・香炉・幡などを与えた。 甲戌 陸奥の蝦夷の自得が要請していた金銅の仏像や仏具が付与された。
持統天皇8年 (694)	1・丁未 務大膳などの位を、大唐の7人と肅慎2人に与えた。
持統天皇10年 (696)	3・甲寅 越の渡嶋の蝦夷、伊奈理武志と肅慎の志良守草薙に錦の袷袴や緋と紺の施などを与えた。
文武天皇元年 (697)	10・壬午 陸奥の蝦夷が特産物を進上した。 12・庚辰 越後の蝦奴に物を与えた。
文武天皇2年 (698)	6・壬寅 越後国の蝦奴が特産物を進上した。 10・己酉 陸奥の蝦夷が特産物を進上した。
文武天皇3年 (699)	4・己酉 越後の蝦奴106人に位を授けた。

(『日本書紀』・『続日本紀』)

本書紀』から判明しているだけで数百人以上におよぶ。

しかし、石神遺跡出土の東北系黒色土器の大半が飛鳥浄御原宮期から藤原宮期の遺物や遺構にともなうことが判明したことをふまえて、『日本書紀』、『続日本紀』をみると、飛鳥浄御原宮期から藤原宮期における蝦夷の飛鳥来訪は人数が斉明朝に匹敵するだけでなく、記事の数では上回っており(表19)、今回の再検討の結果とはかならずしも矛盾を生じないことがわかる。

5 おわりに

出土遺構および共伴遺物を検討した結果、斉明朝よりさかのぼる東北系黒色土器としては、唯一、SD1331B(側石抜取穴)出土品にその可能性をみいだすことができた。いっぽう、調査時の所見から藤原宮期以降とされるSD310を除く各遺構から出土した東北系黒色土器51点は

いずれも飛鳥浄御原宮期から藤原宮期の遺構もしくは整地土の出土で、共伴土器も飛鳥Ⅳ・Ⅴに位置づけられる。以上のことから、石神遺跡出土の東北系黒色土器はその大半が飛鳥浄御原宮期から藤原宮期にもちこまれたもので、同時期の遺物とともに土坑や溝に投棄されたと理解すべきと考えられる。

今後、考古第二研究室が継続して取り組んできた須恵器の産地比定の結果や今回の検討をふまえて、東北地方をはじめとする各地域と都城の土器との交差年代を改めて整理していく必要がある。また、石神遺跡では今回検討対象とした東北系黒色土器だけではなく、新羅土器が数多く出土していることも知られているが、東北系黒色土器同様、出土遺構および層位があきらかにされていないため、これらの年代観も含めて再検討する必要性があるだろう。

(土橋明梨紗)

註

- 1) 土橋明梨紗「石神遺跡SK1244・1245・1246・1247出土の土器群」『紀要2019』。
- 2) 「石神遺跡第4次調査」『藤原概報15』1985。「石神遺跡の調査(第11次)」『藤原概報23』1993。巽淳一郎「飛鳥石神遺跡出土の東北系黒色土器」『蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムⅡ・資料集—』日本考古学協会、1997。
- 3) 『郡山遺跡発掘調査報告書—総括編(1)—』仙台市教育委員会、2005。
- 4) このほか出土地点不明品が2点、時代不明の遺物包含層や中世以降の耕作溝・小土坑出土品が10点ある。
- 5) 森川実・大澤正吾「石神遺跡B期整地土・SD640出土の土器群」『紀要2018』。前掲註1土橋明梨紗2019。
- 6) 西弘海「土器の時期区分と型式変化」『藤原報告Ⅱ』1978。西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』平凡社、1982。
- 7) 尾野善裕「飛鳥時代宮都土器編年の再編にむけて—飛鳥・藤原地域を中心に—」『飛鳥時代の土器編年再考』奈文研・歴史土器研究会、2019。
- 8) 大澤正吾「飛鳥時代における杯C・杯Aの変遷とその区分」『飛鳥時代の土器編年再考』奈文研・歴史土器研究会、2019。



図167 檜隈寺周辺の地形図 1 : 12000